



チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) News Letter vol.5

2011年1月発行

CRNはインターネット上の子ども学研究所です。
<http://www.crn.or.jp>

Contents

CRNニュースレターvol.5では、
第6回東アジア子ども学交流プログラムのご報告を中心にお伝えします。

- 新年のご挨拶・CRN日本語サイトのご紹介 ————— ①
- 第6回東アジア子ども学交流プログラムのご報告 ————— ②③
- 関連学会の動向・刊行物のご紹介・CRNのあゆみ ————— ④

新年のご挨拶

CRNは今年設立16年目になります。ノルウェーのベルゲンで開かれた国際会議で、子どもに関心を持つ人々がインターネットを通じて、世界のよりよい未来を築くためにと計画をしたのが1992年、わが国ばかりでなく世界に向けそれを実践しようと、ベネッセコーポレーションの支援を受けて、CRNの日本語と英語のサイトを立ち上げたのが1996年、続いて2005年には中国語サイトも立ち上げることができました。当時を思い出すと如何に月日の流れが早いかを実感します。今年、2010年は、ユーザビリティを重視して日本語サイトをリニューアルしました。この15年の間に、いくつかの国際機関からも注目され、連携を深めています。CRNがよくここまで育ったものと感無量であり、ご協力、ご支援いただいた皆さまには感謝の念で一杯です。

CRNの国際活動は活発になり、5月には、韓国・晋州にある晋州教育大学より、「子ども学研究所 計画のため招かれて、子ども学の講演を行いました。7月には、中国・杭州で開かれた環太平洋乳幼児教育学会 (PECERA)「Early Childhood Education in a Changing World」に参加し、11月には、北京の中華女子学院にて「第6回東アジア子ども学交流プログラム」を開きました。

もちろん、国内で開かれた、7月の日本赤ちゃん学会、10月



の日本子ども学会もCRNにとっては重要でした。特に日本子ども学会に、米国NICHDで子どもの成長・発達と保育の関係を研究されたSarah L. Friedman女史をお招きできた意義は大きいと思います。女史は、お茶の水女子大学、甲南女子大学、武庫川女子大学、NHK放送文化研究所、ベネッセ次世代育成研究所5周年記念シンポジウムでもご講演され、わが国の子どもに関心を持つ研究者にとってよい機会になりました。

2011年も、この2010年のCRNの流れを継承し、一同力を合わせて、コンテンツを中心によりよいものにする所存です。皆さまのご指導、宜しくお願ひいたします。



Child Research Net 所長

小林 登



CRN日本語サイトのご紹介

●CRNとは？

「子ども学 研究所です。」「子ども学」を柱に、インターネットによるネットワークと、シンポジウム、講演、プレイショップなどの研究活動を生かし、世界中の研究機関や研究者と交流しながら、子どもを取り巻く諸問題の解決に取り組んでいます。

●CRNサイトには何があるの？

CRNサイトには1996年設立から15年間分の、子どもに関連する論文・レポート、教育実践事例、子育てに役立つ情報など幅広い分野の情報・データが蓄積されています。子どもに関することや困ったことがあればぜひCRNにアクセスしてみてください！あなたの疑問や悩みを解決するヒントがたくさん潜んでいます。

●CRNのメルマガやRSS配信とは？

CRNサイトでは毎週新着記事を掲載しています。そんな新着記事をタイムリーにお知らせするメルマガ(2週間に1回)や、RSS機能(更新情報を即時配信)があります。最新のお知らせや特典付きアンケートのご案内など、メルマガならではの特典もありますので、ぜひご利用ください！

第6回東アジア子ども学 交流プログラムのご報告

日程:2010年11月23日・24日 場所:中華女子学院 <中国・北京> テーマ:幼小連携—教育の公平性と質の関係の視点から—

【東アジア子ども学交流プログラムとは?】

CRNでは2007年より「東アジア子ども学交流プログラム」と称して、育児・保育・教育に関係する東アジアの大学、教授陣の相互交換講義を支援し、子ども学の普及と国際化を目指して、学術交流を推進しています。

11月23日(火)、24日(水)に、チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)、中華女子学院共催で第6回東アジア子ども学交流プログラムを開催しました。今回は、中国において4回目となるシンポジウムで、「幼小連携 - 教育の公平性と質の関係の視点から - 」というテーマで、2日間にわたって日本と中国の専門家による最新の研究調査について、7つの講演と、2つのワークショップがありました。2日目の午後には、子育て公開シンポジウムを行いました。会議期間、日本グッド・トイ展示会も開催し、日本でグッド・トイに選ばれた数多くのおもちゃをパネルで紹介するとともに、実物のおもちゃに触れることのできるコーナーも設置しました。

両日で延べ1500人ほどの方々が参加し、活発な意見交流が行われ会場は終始熱気に包まれていました。以下詳細をご報告します。

1日目の講演

2010.11.23

〔登壇者〕小林 登(CRN所長、東京大学名誉教授)、朱 家雄(華東師範大学教授)、榊原 洋一(お茶の水女子大学教授)、馮 曉霞(北京師範大学教授)、秋田 喜代美(東京大学教授)、鄒 平(北京市大地実験幼稚園園長)
※名前は登壇順

●子どもは二つの情報によって育っている — 遺伝と文化



▲小林 登氏

子どもは「遺伝」と「文化」という2つの情報によって育っています。遺伝的な情報は進化の道をたどり、長い期間を経て変化してきましたが、文化的な情報は進化と比べて短い時間で変わるものであると述べました。子どもの未来の教育を考える際に、この2つの情報の在り方、メカニズムを考えて教育をデザインすることの重要性に触れました。

●幼小接続についての考察



▲朱 家雄氏

中国における幼小接続の歴史、現状と課題についての考察がありました。1990-1994年にUNESCOと中国教育部の共同で行われた幼小接続の研究は、幼稚園、小学校のカリキュラム改革に影響を及ぼしました。20年を経て、現在の中国でもっとも解決すべき問題は何か。朱氏は、

「教育の公平性」と「教育資源の均等化」であると主張しました。

●小1プロブレムと発達障害



▲榊原 洋一氏

近年日本の教育界で問題となっている「小1プロブレム」を生じさせる原因は何であるのか、昔と今では何が異なるのか、「小1プロブレム」気になる子どもたち「発達障害」の3つのキーワードの関係についての考察がありました。

●義務教育の機会均等と入学準備



▲馮 曉霞氏

現在の中国では義務教育の公平性に注目が集まっていますが、就学前教育の機会が不平等であれば、義務教育の入学準備に格差が生まれ、ひいては就学後の学習状況にも影響を及ぼすという研究発表でした。就学前教育段階においてこそ施策を打つ必要性を強調しました。

●幼児期から児童期への教育

—子ども・保護者・教師の経験から考える幼小文化間移行—



▲秋田 喜代美氏

幼小文化間移行をどのように経験しているのか、子ども・保護者・教師を対象に行った調査研究の報告がありました。また時代背景に伴って幼小連携の見解や視点が異なる点や現在の課題に触れた上で、日本での国・自治体・園における取り組み事例について紹介しました。

ワークショップ①

●資源を共に享受し、双方向連携を行い、 幼児の小学校入学への適応力を高める



▲鄒 平氏等

北京市大地実験幼稚園園長の鄒氏を中心に、園の「幼小接続・教育一体化」モデルの研究と「幼小接続カリキュラム」の開発についての紹介がありました。同幼稚園の教諭や保護者の方からの発表もあり、多角的な視点から園の取り組みについて言及しました。

張 燕(北京師範大学教授)、王 練(中華女子学院副教授)、周 念麗(華東師範大学副教授)、万 鈞教授、朱 家雄(華東師範大学教授)、榊原 洋一(お茶の水女子大学教授)※名前は登壇順

●都市は、流動児童に基本的な入学前教育を提供できるのか？—平民教育は教育の公平性を実現させる現実的な選択である—



▲張 燕氏

出稼ぎ労働者の都市部への移動とともに、流動児童の就学前教育の需要が増加していますが、行政側の受け皿が依然完備されていない状況で、民間の無認可幼稚園が台頭している現状があります。しかし、流動児童の就学前教育を保障するには、「第三の道」(すなわち非営利の民間団体NPO)が必要であり、保護者、子ども、教師が三位一体で行う平民教育が流動児童の就学前教育を保障し、教育の公平性を促進する1つの鍵になるのではないかと述べました。

●流動児童の親から子どもへの教育期待及び教育現状調査—北京市皮村調査のケース—



▲王 練氏

北京市皮村の子どもの親を対象に「流動児童の教育状況」と「流動児童の親から子どもの教育に対する期待」について、調査研究結果の発表がありました。子どもと保護者の状況を明らかにし、流動児童に質の高い就学前教育を提供することで、教育の公平性という目標の実現をはかることが重要であると述べました。また家庭教育環境改善のため、親支援活動も必要との提案がありました。

ワークショップ②

●就学前教育の公平性についての考察—湖南省37-48ヶ月の幼児1,000名を対象にした発達調査—



▲周 念麗氏

湖南省の都市部と農村部で37-48ヶ月児とその親たちを対象に行った発達調査の結果についての報告でした。都市部と農村部では言語・認知・運動などの能力の側面において有意な差がみられ、家庭の経済力・学歴などの影響を受けていることが分かりました。貧困地域へ目を向け、さまざまな支援活動を行うべきであると強調しました。また、補足する形で、中華女子学院の鄒敏氏と華東師範大学の石麗娜氏からそれぞれ、「流動児童の現状調査報告」、「障害児の統合教育」をテーマに発表がありました。さまざまな角度から、教育の公平性についての考察がなされたワークショップとなりました。

●子育て公開シンポジウム

現地の子育て中の親や現場の幼稚園教師向けに行った公開シンポジウムでは、中国の万鈞教授による食育の講演、朱家雄教授による早期教育に関する講演がありました。その後、日本の榊原洋一教授を交えて会場からの質問に答える形で進行しま

した。保護者の方からは早期教育、学力のほか、子どもの風邪やアレルギーなどの健康面に関する相談・質問が多く寄せられ、質疑応答の時間が足りないほど白熱しました。



◀子育て公開シンポジウムの様子

●グッド・トイ展示会

大会期間中、日本グッド・トイ展示会を実施しました。杭州・上海での東アジア子ども学プログラムに次いで中国で3回目の開催となります。東京おもちゃ美術館多田千尋館長の監修のもと、日本に流通する優秀な玩具に贈られる「グッド・トイ賞」受賞作品の中から、心や身体の成長に必要な「イマジネーション力」、「自然や科学への好奇心」、「音楽、アートな感性」、「運動能力」、「コミュニケーション力」、以上5つの栄養素を育むことができるものを厳選し紹介しました。中国現地の多くの研究者・幼児教育関係者が実際におもちゃを手にとって、試行錯誤しながら遊び方を学んでいました。



◀グッド・トイ展示会の様子

2010年度も、日本と中国のこぼれ文化の壁を超えた学術レベルの高いプログラムが実現し、東アジアにおける子ども学交流がまた大きく前進したと感じています。今回の幼小接続のテーマでは、日本と中国における課題の違いが明確になり、他国の状況を見ることで自国を振り返る機会にもなりました。今後も世界が抱える子どもに関する課題を追求し、このプログラムを通して学術交流を深め、解決を目指して邁進していきたいと思えます。

引き続きCRNの活動にご指導、ご支援のほど、宜しくお願いします。

関連学会の動向

2010年10月2日(土)・3日(日)に埼玉の川越市市民会館で「子どもサポートの統合 - 危機にある子どもたち -」をテーマに第7回子ども学会議学術集会在開催されました。アメリカのSarah L. Friedman氏(Health Research & Policy, Institute for Public Research CNA)による「Child Care and Child Development」と、高木裕三氏(東京医科歯科大学歯学部小児歯科学分野教授)による「歯と口の保健と子どもの成長」の2つの特別講演が行われました。その他、大会長講演、教育講演、5つのシンポジウムが開かれ充実した学術集会になりました。



◀学術集会の様子

刊行物のご紹介

東アジア「子ども学」交流プログラム報告書 2010年度版を3月に発刊します!

2010年の講演内容の詳細をコンパクトにまとめる予定です。2008年度、2009年度の活動報告書が発刊されていますので、どうぞご覧ください。ウェブサイトからPDFでダウンロードできます。

<http://www.blog.crn.or.jp/about/publication.html#2>



Vol.1



Vol.2



Vol.3

CRNのあゆみ

1996年	・日本語・英語サイトオープン ・シンポジウム「マルチメディア社会の子どもたち」
1997年	・シンポジウム「中高生のデジタルな友達づくり」 ・ジェーン・グドール博士講演会「チンパンジーの世界と自然のお話」 ・ジェイ・ベルスキー博士講演会「子どもの発達と家族研究」
1998年	・国際シンポジウム「メディアは子どもをどう育てるのか?」 ・ジェーン・グドール博士講演会「チンパンジーと自然のお話」 ・CRNウェブサイト「WEBデザインアワード」銀賞受賞
1999年	・公開座談会「学級崩壊はしついでにといめられるのか?」 ・プレイショッ プ「PLAYFUL」
2000年	・公開座談会「『学校』と『家庭』を結ぶもの」 ・『チャイルド・リサーチ・ネット』発刊 ・プレイショッ プ「Feel the Media」 ・国際シンポジウム「21世紀の子育てを考える」 ・『子育てのスタイルは発達にどう影響するのか』発刊
2001年	・プレイショッ プ「ふゆものがたり ～プレイフルストーリーをつくらう」など ・『CRN YEAR BOOK 2001』発刊 ・研究拠点「ながやまチーきち」開設(～2002年) ・『新しい学びと遊びの実験研究「ながやまチーきち」』発刊 ・音のワークショップ(～2003年)
2002年	・CRN 実践保育研修会「保育の質を考える - 心とからだを育む視点から」 ・『CRN YEAR BOOK 2002』発刊 ・プレイショッ プ「カラフル王国であそぼう」など ・『子ども学研究会』発足(～2003年) ・メディアワークショップ(主催:CRN子どもとメディア研究室) ・チーきち放送局をつくらう
2003年	・『CRN YEAR BOOK 2003』発刊 ・『子ども学研究会Report2002』発刊 ・『日本子ども学会』設立 ・『こがねいメディアキッズ』(～2004年)
2004年	・『CRN YEAR BOOK 2004』発刊 ・『第1回子ども学会議(「日本子ども学会」学術集会)』 ・チャイルド・サイエンス懸賞エッセイ スタート ・中国の子ども研究機関を訪問(中国 北京)

2005年	・中国語サイトオープン ・『CRN YEAR BOOK 2005』発刊 ・『第2回子ども学会議(「日本子ども学会」学術集会)』 ・英語ウェブサイトリニューアルオープン ・中国宋慶齡基金会の招聘を受け小林登所長が講演(中国 上海)
2006年	・『CRN YEAR BOOK 2006』発刊 ・子どもの健康に関する学会にて「食育」をテーマに分科会を開催(中国 長春) ・『第3回子ども学会議(「日本子ども学会」学術集会)』 ・中国政府主催のシンポジウムにて小林登所長が講演(中国 上海)
2007年	・『CRN設立10周年記念号』発刊 ・CRN設立10周年記念国際シンポジウム ・『「子ども学」からみた少子化社会』 ・『第4回子ども学会議(「日本子ども学会」学術集会)』 ・第1回 東アジア子ども学交流プログラム開幕式(中国 上海) ・第1回 東アジア子ども学交流プログラム・幼児教育展覧会開催(中国 長沙)
2008年	・日本語サイトリニューアルオープン ・第2回 東アジア子ども学交流プログラム開催(日本 東京) ・『CRNニュースレターVOL1』創刊 *日中英3言語対応 ・『第5回子ども学会議(「日本子ども学会」学術集会)』 ・第3回 東アジア子ども学交流プログラム・グッド・トイ展示会開催(中国 杭州)
2009年	・『CRNニュースレターVOL2』発刊 *日英中の3言語対応 ・『東アジア子ども学交流活動報告書VOL1』発刊 *日英中の3言語対応 ・第4回 東アジア子ども学交流プログラム開催(日本 東京) ・第5回 東アジア子ども学交流プログラム・グッド・トイ展示会開催(中国 上海) ・『第6回子ども学会議(「日本子ども学会」学術集会)』
2010年	・『CRNニュースレターVOL3』発刊 *日英中韓の4言語対応 ・『東アジア子ども学交流活動報告書VOL2』発刊 *日英中の3言語対応 ・小林登所長が韓国晋州教育大学にて招へい講演 ・環太平洋乳幼児教育研究学会(PECERA)主催の第11回学術集会に出席、小林登所長講演 ・日本語サイトリニューアルオープン ・『第7回子ども学会議(「日本子ども学会」学術集会)』 ・第6回 東アジア子ども学交流プログラム・グッド・トイ展示会開催(中国 北京)



＜発行日＞2011年2月28日
 ＜発行＞チャイルド・リサーチ・ネット(CRN) 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階 (株)ベネッセコーポレーション内
 ＜編集人＞後藤恵子
 ＜編集スタッフ＞劉愛萍、横井理絵、山本和桂子、桜井玲子、清水かおり
 ＜デザイン＞原宿春夏